

『二十四の瞳』から学ぶ

1.教育について

私は『二十四の瞳』を見て、当時の小学校での教育について関心を持ちました。明治時代から学校では、書道、体操、算数、国語（復読、読書、作文、書取）などの授業があり、平日は午前9時から午後3時ころまで、土曜日は半日の授業があったそうです。学校給食は1889（明治22）年に始まり、生活が苦しい児童のために無料でおにぎりなどが提供されていたとのこと。なお、高校では当時から今も給食はありませんが、定時制課程の生徒には給食がでていたようで驚きました。

2.『二十四の瞳』と戦争

映画を見たときに一番印象に残ったシーンが、戦争に関わるシーンだったのでこのテーマにしました。

『二十四の瞳』はちょうど太平洋戦争の時代が描かれています。大石先生の夫や教え子たちが戦争に送られ、命を失ったり、傷ついたりしました。また、残された人たちも戦争に苦しんでいました。最後のシーンでは、同窓会で失明した生徒とのシーンが印象的でした。

この小説が出版されたのは終戦から7年経ってからだったということは、壺井栄はこの小説で、教育だけでなく、一般庶民から見た戦争についても書きたかったのではないかと思います。戦争中の小豆島に生きた人たちが、どのような生活をしていたのかが知れたことが学びになりました。

3. 教育の原点

『二十四の瞳』が教育の原点と言われるのはなぜか、なぜ多くの人が『二十四の瞳』に惹かれるのかを調べました。

『二十四の瞳』は小豆島の岬の分教場を舞台にした一人の女性教師と12人の生徒の物語です。『二十四の瞳』は「教育の原点」と言われることがあります。映画村や分教場では、小説や映画の影響から今も全国から教員の来館が後を絶たないとの事です。実際に分教場を訪れてみると「教師から教師を目指す人たちへ宛てたメッセージ」が書かれた白いボードがありました。子どもや若い教師に向けた応援メッセージや教育

に対する苦悩など様々なメッセージがありました。ちなみに、今の定時制教頭の熱い応援メッセージもありました。

このメッセージボードは2013年に岬の分教場で開催された「教育シンポジウム」がきっかけです。54年公開の映画「二十四の瞳」で大石先生を演じた高峰秀子さん、夫で脚本家・映画監督の松山善憲さんと夫妻の養女で文筆家の斎藤明美さん、島内外の教育関係者ら参加者に、教育に懸ける思いや二十四の瞳の感想を白い板に書いてもらったのが第一弾だそうです。現在は9枚目になります。

NHKのにっぽん紀行で「二十四の瞳」大石先生に憧れて～小豆島・岬の分教場」という番組がありました。教育の原点として岬の分教場を訪れ、二十四の瞳を理想に懸命に子どもたちと向き合おうと奮闘する二人の若いおなご先生を取材した番組です。今も多くの先生が分教場を訪れ、自らの思いをノートに書き留めています。

僕は現在塾でアルバイトをして子どもたちに勉強を教えています。時々塾の先生として「これで良いのだろうか?」「もっと分かりやすく伝えられないのか」と悩むことがあります。先生として青二才な僕からしてみれば、二十四の瞳は「先生の在り方」や「子どもをどう思うか、子どもたちに何と言うか」を考えさせられる作品でした。人によって見方が変わってくる作品だと思います。それでも読んだ人・観た人に何かしら考える火種を与えてくれる良い作品だと思います。



<二十四の瞳 映画村・分教場へのアクセス情報>

〒761-4424 香川県小豆郡 小豆島町田浦甲 931

土庄港→映画村 車 55 分

池田港→映画村 車 35 分

坂手港→映画村 車 15 分

福田港→映画村 車 40 分

最寄りのバス停 二十四の瞳映画村

料金 大人 900 円 小人 450 円 ※期間により変更あり